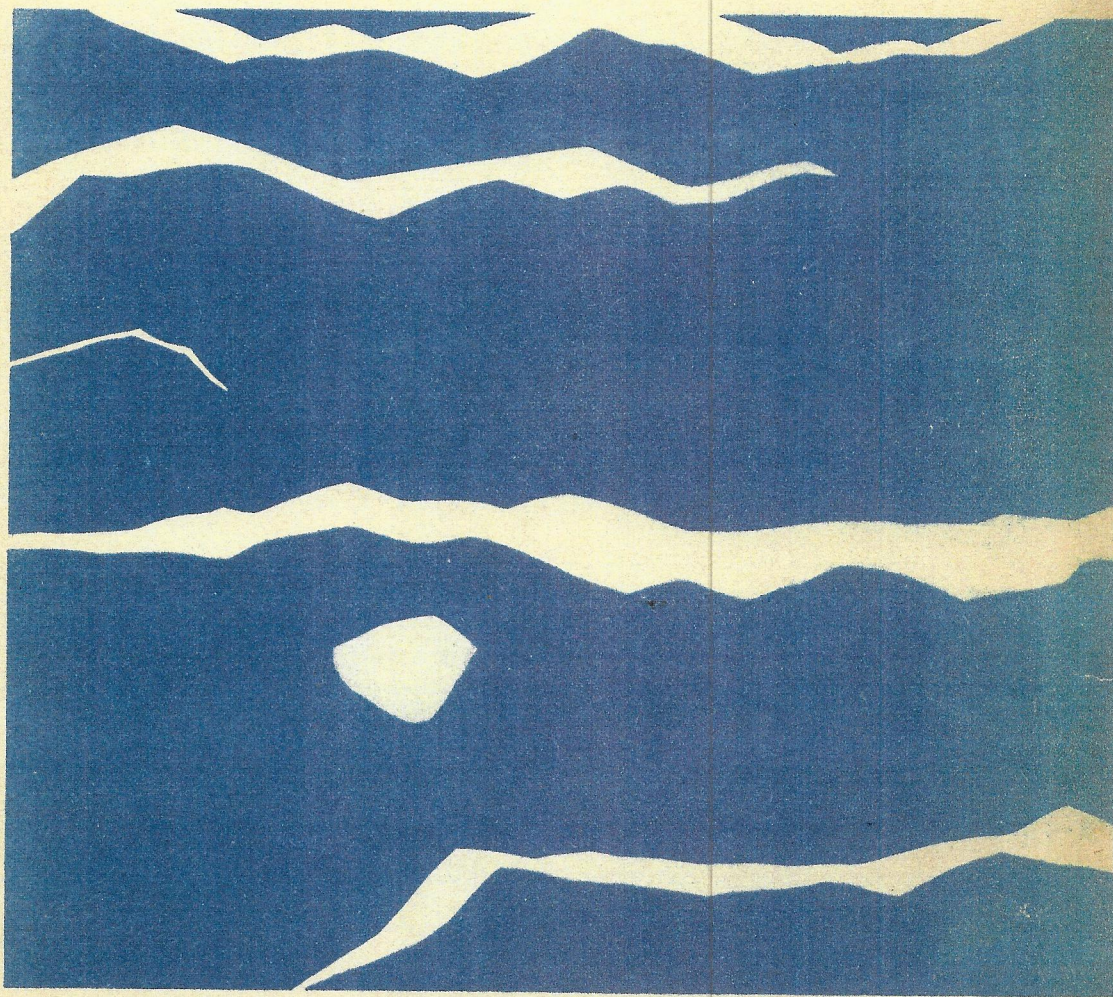


# 山脈



京都府立河守高校文化委員



のある運想的な社会の身努力するのが青年としての義務といえる。

亦あこは考えも今日の社会では益々就職難の波にあおられてゐるのだ。その為それを持とうとする欲望すら妨害されてゐるのである。

が、はたして我々はこれでいいのか、我々はこの社会に質を下げ、全面的とは云はなくては夢に満ちた青春というものを無爲に送つていいものだろうか……。

この青春というものは旅人のようなもので「ああやって来た」と思つてゐるのもつかの間、もう後姿を見送らねばならぬのだ。又青春は人生に於て一番の花ざかりなのだ。

さてここで重要な問題となつてくるのがこの現実の社会から如何にして高遠な理想をもつかしむことであるがこれは難問題だ。がしかし少くとも低い理想なりとも理想だけは充分描きたいものだ。で互ければ進歩は無い。一方、又この難々たる現社会に打ち勝つて若人の夢と理想を飛躍してやるぞ！という反抗の氣魄も大切なものではないだろうか。

以上述べた林友ものは誰でも一度や二度は考えたとに違いないだろうが、現実の社会に堅実に従事せぬという利己心が窺分にはたらく。

しかし、ここでよく考えねばならぬことは、現実

七の分

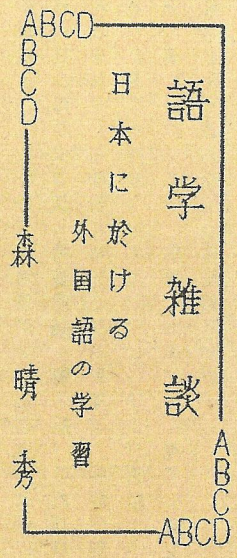
云うのが、ほんその論旨であつた。なる程もつともな話である。

日本では悉く一番信頼の出来る英語英文学関係の書物を多く出しているK出版社が数年前、日本の英語英文学の研究は今こんな所まで来ております。一度お見知りおき下さい。と云う意味で海外向けの雑誌を出しを争つたが、その編集者の筆に在る英語の中に誤つた英の若い一詩人がそれを指摘し、一流の出版社ともあるものが、と色をなしては争つた。知るべのさる米人も大学を出たある日本人に *father's* と *father's* の区別を知つてゐると議論を吹きか引られて返答に困つた。「同じだと思つたが、はつきり解らない」と云つと、ニヤリとして説明を始めた。所がその説明を英語でしてはと解つたのは、彼が別れ際に「さようなら」と聞きなれを日本語で云つた時をうたせてゐる。

ABCから心理小説に到るまで、我々が英語を習う期間の最大は六年から十年である。十年と云えば、読書もそこそこ出来たが、十年前に生まれを赤ん坊からもう十本の少年である。日常の用足しから、かたり友理屈迄云える年令である。それなのに十年も英語を習つた大人がエイビリシのエイの字も喋べれぬとは驚くべき事だ。それでは英語習得の道に並走せよと云う

現実と追いまわされてゐるばかりでなく、高邁なる理想や夢もちたいものだ。そのことによつて我々にバトンが受けつがれた時、少しでも、これらを実行に移そうという努力によつて平和的な社会を建設して行きたいものだ。

それは又我々での尸史の中の意義でもあるのだから思



最近の文芸春秋(三十二年五月号)に、「英語よみの英語知らず」と云う一文が発表されて、日本の英語教授法に対する痛烈な批評の友されを争があつた。

日本人はものすごく難解な文法上の問題でもすらすら解けて、相当程度の難文もなんなく読め争が出来るとし、英米人ですらとちらを取らざるべきかを迷う前置詞をとも日本人には解る。英語を習い英語を教える日本人の一人一人が文法学者である。なのに、中学、高校、大学を通じ、十年間も英語を習つておきながら口々に英語を話す争も出来なければ、書く争も出来無い。と

。これはしかし、我々が日本人であつて、日本で英語を習つてゐると云う事を忘れた暴論である。例の文芸春秋に現われた一文も、従つて妥当性を欠く。本国人に通ずる英語が話せる様になるには英語が話されてゐる国へ行つて一年程そこで生活をするか、又は或る程度の教養のある英米人と友達になるのが一番良い方法である。「実用英語」と云うことばがあるが、我々も何れも英語を習つて通訳になるのではない。又実際に英語を話す必要の生ずるのほどこの国へ旅行した時位なものである。おまけに大部分の日本人はそんな旅行をしなくとも出来ぬ。

順序として、では我々はなぜ一体英語を習うのかと云う事を考えてみたい。今も云つた様に、「日本に於いてはなぜ習うのかと云う事である。しかめつ面をして云へば、英語を通じて、欧米の文物を知り、その背景にある尸史の流れを知る爲にである。それでは日本語に訳されたものを左に読んで解るではないかと云う人もあるだろうが、英国だけに限つて考えれば、英語を知ると想えば英語を説く他に方法はないのである。英語それ自体の中に英国——西歐の代表の一つとして

の——国産な物語られてゐるからである。日本では「僕の兄かどうした」とか「妹かどうした」とか云う。「姉」「弟」と云う人称代名詞もある。しかし英語には、「兄」「弟」「姉」「妹」をひたつ



るめて、それそれ *brother*、*sister* と云う一語しかない。又我々は「兄」「姉」との語を呼びかけに便して「兄ちゃん遊んで」とか「姉ちゃん宿題や」といって云う。これは「兄」とか「姉」とか云う階級に人間をあてはめて考えるのであって、英語とは異なる。「ジャック」とか「ペティ」とか人の名前を直接使う。つまり兄弟姉妹の間に差別をつけないのである。「伯父」「伯母」又は「叔父」「叔母」の關係についても同様である。ついでに脱線しておけば、階級に差別をつける云う事は、下層の地位にある者を卑屈にする。上の者に対して出来るだけ自分を印象づけたい事、或いは自分の意見をさしひかえる事が最上の礼儀とされて来た日本に於いては、直接矢面に立えずその身を守る意味からも、ことはの上である意見の出所をはっきりさせず、否定が肯定がすらもこまかしてしまふ傾向が強くあつてゐる。「私」と云う一人称を省いて、いくらでも話しが出来る云うのがそれで、これは「私の」の意見の左とはつきり云わないのである。「です」「でありません」を文の最後に於いて自分は否定的な意見の方を肯定的の方は、最後まで固かぬは分らない。おまけに話の終りの方を口の中でモゴモゴ云つてしまわれると、その人の意見はどうかの意見がつかなくなる。これはどう云う云い方をする人が悪いのではなくて、どう云う云い方を許す日

セウ中

を学び始める際にこの方法があつて、そのいすれを取るか云う問題にもあるつながらを待つてゐる。一つは会話から英語に近づく方法、他は文法から近づく方法である。会話から近づくこととする方の云い分はこうである。英語はギリシヤ語のラテン語の根に死んだ言語ではない。生き左人間によつて使われている現在生きてゐる言語である。だからそれを耳に聞える「生き左音」としてとらえるべきである。英米に生れ左赤ん坊を見よ、ことを覚え始める頃に、三人称單數現在形 *is, are, has, have* は *are* で受けるとか意識するが、そう云う事はその言葉を充分使ひこなせる程になつて始めて問題にすればよい。それも必興のある時だけだ、と云う。これに私もあえて異議はと左えぬ。しかし日本人が英語を習ひ始めるのは通常十才を少し過ぎてからであつて、その頃には相当複雜な事柄も理解出来る。だから英語は大抵こう云う組み立てになつてゐる、従つてこう云う風に組み立ててゆくとは、意味の通る文になるのです、又こんな云い方はこう云う意味を表わすのです、と云つた知識を覚えてくれる文法を大いに併用して学習する方が最時間の中に大きな効果を期待出来る。一つの意味を表わすことには「音」と「文字」の両方あつて、その相方から一つの「意味」に近ずいてゆくのが本索の要であり、記憶を強く自然な形で助けてくれる。

本語の構文法に異がある。しかし、英語はそうではない。「し」と云う一人称單數形を用いずに十分間友人と話そうとしても、ほとんど不可能である。「ゆつ左」のか「ゆらなかつ左」のかも、英語では必ず最初に云つて、私の立場はこうなのです。と、先ずはつきりさせる。その理由、条件、時、場所などの説明はあとからあとからつけ足して行けば良いのである。

今挙げ左例は、それぞれに大きな背景を待つて兩國語の極く小ざら一面を語る材料にしかすぎぬ。しかし少くとも或る国の言葉を習う以上、その言葉の背景にある国民性を学び取らなければならぬ。日本語ではなせ「兄ちゃん」と呼びかけるのか、英語にはなぜ *brother* と *sister* だけしかないのである。その言語と自國語との違いを知り、その背景を知るであつて、言語そのものを駆使する技術の及を身につけるのはよい。「実用英語」と云う言葉も良く考えてから受け入れねばならない。英会話ばかりあつて、英語がペラペラになるのは勿論結構な事で、通訳として、ガイドとして自分の報酬にありつてゐるであらう。しかしそこには「鉄棒」があつて、それを振りまわす「鬼」はいない。左と之屋ても、「鬼」の方が「鉄棒」に振りまわされてゐる場合の何んともいふことか。

今述べて来た事は実は英語（及びその他の諸外國語）

「武器よさらば」を讀んでゐる時であつた。その中に出て来た *Sharpnel* の云う言葉がいくば、群引を探しても分らず、仕方がないので、路上で米兵を一人つかまえた。手帳に書きつておいた左のを見せるとどう読むのかと聞く。こうだ、と発音してやると座に、銃器類の部分品の一つだ、と教えてくれた。所でこの兵隊は字が読めないものである。きつと本左と手にし左争もないのである。ヘミンタウエイの名前すら知らなかつた。なる程、喋べる英語（いや米語）のスピードはさすが本物で、我々日本人が足元えも寄れないものではあつたか。

日本人の英語としては、英米の文学作品、學術研究書が読める程に左れば、それで一応完成の域に達し左と云つて良いと思ふ。科学校係の書物とか、文學の批評書のあるもの、或いは初心者向きの文學作品——實は文學作品に初心者向きも何もないが、強いて云えば高校三年項から大学初年級の教科書に使われる程度のもの——は、高校で習う英語を身につけておれば、大抵読める程に出せてゐる。いや、高校三年の英語の教科書が、それらのものを讀める力がつく程になつてゐると云う方が正確かも知れ左い。どの教科書にでもよく取り入れられてゐる「テイヒッド・ヌオン」の語本と、あれがすらすら讀めれば、そこらにある探偵小説とと結構朝めし前である。左すかしい事は左い。



或る一つの意味を伝えるのに、「音」と「文字」との二つがある事はすでに述べた。この二つは別々に存在するのではなくて、その中いすれが欠けても、他の一方は、存在する価値を失う。私は今、日本人として本が読めるだけで、充分であると云つた。では「音」の面は無視して良いのか。いや、その事については、今注釈をつけねばなるまい。列の「水仙の歌」など、教科書にもよく名が出るフースワスと同時代の詩人コールリッチに「老木夫行」と云う長編の詩がある。この詩は、結婚式に行く途中のある男を海から捕つた老木夫がつかまえて、自分の体験談を物語る形式の詩で、次の引用はその中からである。黙読願ひせし。

*The fair George blew, the white foam flew,  
The furious stream mad off free;  
We were the first that ever burst  
In to that silent sea.*

(大意)

追い風はそよぎ、白き浪は飛び交ひ、

絶叫のびやかに流れて去りぬ。

かの沈黙の海に分け入りしは

我らおははじめのなりぞ。

この句が云っている内容は唯、船が走つて行つたと云う極く簡單な事であるが、何れも読み返せば、そのリズムは非常に複雑で、しかも極めて音楽的である。

で文全体の読み方を研究すれば良い。それには手近かにある語学レコードで結構間に合ふ。

こうして一つの「文字」に対する「音」の重要な事を知り、その両者の一致を説いて始めて、ことばに対する語感が出てくるのである。読書力がつくのである。「但し……」である。前にも云つた通り我々の目的はあくまで「本が読める様になる事」——先に引用した詩の一節すらも充分理解出来る能力を含ま——であつて、会話に、熟達する事ではない。会話を練習する事、及び文の音読の練習は、「文の意味を感得しなく理解する爲の」手段に過ぎないのである。もし会話が出来るれば本が読めると云うのであれは、英語を話すすべての英國人米國人は本を読んでその内容を理解出来るし、かた大詩人米文學者であり、すべてが文學作品の鑑賞力を持っていると云つた事にもなりかねない。

さて、読書力を増すには、文法の知識がなくてはならぬ。始めての構文、始めてのことばの使い方に出来る時、それを説明してくれるのは大抵の場合文法書である。最初の「和綴しつ」文法書集ではない——例えはマメタンの如き——を参照しつゝ文法書を横に置いて教科書でも読んで読む進んでゆくのが誰れでもやる方法である。しかし私は、高校二年の後期ともなれば、英語の構造なり、英語の学習法なりは、見当がついて来るものだから、あえて文法書にシガミ

事に気すく、*"blow"*, *"flew"*, *"burst"* の一れそれが一行の中で韻が合つ *"fair"*, *"flew"*, *"furious"*, *"followed"*, *"free"*, *"first"*, 及び *"George"*, *"blew"* 或は *"silent sea"* と云つた具合に韻頭が合つていて、アンタロサクソンの昔を思わせる様子を素朴で実直な感じを与える古くからある詩法である。又全体から見れば、*"The fair George blew, the white foam flew"* と云う「文字」の意味を讀者に伝える上に「音」がどれだけ大きな役割を果しているかが解るのである。従つてこの一節を充分に理解する爲には、声を出すか少くとも声を出すつもりで讀まなければならぬ。

この「音」——ことばの音楽——に対する感覚は「会話の練習」を通じて最もよく体得される。しかし本来の案に於ける「会話の練習」は我々日本人にとつて非常に困難である。その場合には「発音記号」を最大限に利用すれば良い。現在の発音記号はがなり正確に出ていて、一応信頼して良いものであるし、会話のコツをいくらか覚え左所で、我々にとつては旧々の單語の発音を充分に知っておかねば役に立たぬ。その上

ツク必要はないと思つてゐる。それはがえつて読書のスピードを落し、文法を知つて讀み書きを知らず（この段階では末に英語読みの英語知らず、と云う所にすら到達していない事に注意）と云う日本人の例の特徴を免罪せぬとも限らぬし、又、これはか先にあつて、その後文法が出来たと云う文法そのもの、才二次的性格を思つても、リーディングを先ず優先するのが正法であるのだから……。だから大学の受験をする者であつても、三年の後期になるまでは英語（例えは英文和訳の問題集でも、探偵小説でも）を讀みまくつて、しほし文法書に別れをつけてゐるべきである。文法書と再び相まみえるのはある程度の読書力がついてからでも決して遅くはないし、又どうでもなければ、文法で習う更に進んだ知識は其の所々かものとはなりにくい。英文法を始めて習う時の志すかしさと、国文法を初めて習う時のそれを比べれば自ずから解ることと思ふ。国文法の場合にはすでに身につけてゐる言語のありさまを改めて組織的に学ぶのに對して、英文法の場合、未知の土地の地図を前に、「この煙草屋の隣りに銀行があつて……」と云つた説明を聞くのと同じ右のだから。で、勿論、その再会の折には徹底的に文法の細則を究めねばならぬのは云うまでもない。それにしても、文法はやはり文法に止まるのであつて、「英語のすべて」ではない。我が文法学者殿が



「英語知らず」とののしられる悲しさもそこに根ざしてゐる。*"It's me"* にしろ *"who is he talking with?"*

にしる。又或いは *"Do you have a pen?"* にしろ

一度は文法学者が非難された語法ばかりである。デ  
ンマークの英語学者イエスベルセンはその著書「文法  
の原理」(一一七頁)の中で *Quintus whom they say  
day is killed tonight* の whom は *they say*  
の目的ではなく *"is"* の主語なのだから *"who"* と云  
う主格で右ひれはならぬと一般には考えられてゐる  
が(注)日本でも勿論そう教えられてゐる。そう云  
う方が誤りで、実は一般の人々が考えてゐるよりも  
はるかに多くの有名作家達によつて用いられて来左  
正しい英語であると云つて、十四世紀から現代に到る  
迄使われ左用例數十例を反証として挙げている程であ  
る。彼の説の当否は別として、ことは人間と云う非  
論理的な存在物によつて使われるものであつて及れば  
そのことには、ひとつひとつ法則では割り切れぬも  
のがあるのもおぼなるか左である。ことは科学的な  
、或いは論理にがたう約束の上になり立つてはゐない  
のである。だからその非科学的なことはの一つである  
英語を教ふものにするにも、「科学的学習法」と云つ  
たはやりのことには信頼し切れぬものがある。唯  
勇猛邁進、辞引とにらめっこで、逆きながら読みま  
くるほか、道はあるまい。

（五七年八月十五日）